日本建築学会大会学術講演梗概集
（北陸） 2010年 9 月

戦前期の北海道における北海道製糖と明治製糖の社宅街

正会員　○辻原　万規彦*　　同　　角　哲**
同　　今村　仁美***

北海道製糖　　日本甜菜製糖　　明治製糖
製糖業　　甜菜　　航空写真

１．はじめに

戦前期日本の主要な産業の一つであった製糖業を対象に，各地に建設された工場と社宅街の形成過程を明らかにし，比較することを目指して，既稿では沖縄県の南北大東島の事例を報告した[1)]。それに続いて，本稿では，北海道における戦前期の製糖工場とその社宅街について報告する。なお，本稿では，当時の用語や呼称をそのまま用い，引用文などは，原則として現代仮名遣いに改めた。

２．北海道製糖帯広工場の社宅街（図１）

北海道では，M13（1880）に官営紋鼈製糖所（後に民営化），M21 に札幌製糖が設立され，甜菜を用いた製糖を行ったが，M29 には操業を停止した。その後，T8（1919）に帝国製糖社長の松方正熊らによって北海道製糖（以下，北糖）が設立された。その帯広工場は，もと晩成社の農場用地（大正村大字売買村）を買収して，T9.２月に着工，翌年１月に操業を開始した。工場の設計はアメリカの Dyer 社であるが，社宅や福利施設の設計は不明であり，工場も含めて施工会社についても不明である。

社宅街は，社員用の社宅が並ぶ「高台」と作業員用の社宅が並ぶ「下台」に分かれていた。医務室も工場創立当時から設けられたが，復原図に示したものではない可能性が高い。また，甜菜集荷用に建設した十勝鉄道の開設によって停車場周辺に小市街が発生し，工場の立地する大字が大正村から分離して川西村となるほどであった 。

３．日本甜菜製糖清水工場の社宅街（図２）

T9 には台南製糖取締役の河井芳太郎らによって日本甜菜製糖が設立された。その清水工場は，M40 に開設された省線清水駅前に形成された人舞村清水の市街地に隣接して，T9.７月に着工，翌年 10 月に操業を開始した。工場の設計は帯広工場と同様に Dyer 社であるが，社宅などの設計や施工は同じく不明である。なお，日本甜菜製糖は，T12 に明治製糖（以下，明糖）に吸収合併された。

甜菜を集荷するための子会社である河西鉄道の社宅や傍系会社で隣接した敷地に工場があった明治製菓の製酪工場の社宅も同じ敷地にあった。詳細な年代は不明だが，入手できた図面では，作業員用の社宅には，寒冷地対策のためか，炉が設けられていた。

４．北海道製糖磯分内工場の社宅街（図３）

現在の標茶町字熊牛原野にあった北糖の磯分内工場は，S10.10 月に着工，翌年 12 月に操業を開始した。工場の施工は銭高組で，社宅やその他の施設についても銭高組の可能性が高い。工場は S45 に閉鎖，建物は解体された。

工事中の写真から，医局がかなり早い段階から建てられていたことがわかる。当時の磯分内は，駅前に数戸しかない小集落であり，標茶村全体でも医療体制は貧弱で，釧路までの交通の便を考えても必須の施設であったと考えられる。また，会社による整備ではないが，工場の建設に伴って市街地の急速な発展，郵便局の開設，小学校の新築移転などがみられた。

５．明治製糖士別工場の社宅街（図４）

明糖の士別工場は，当時の士別町が誘致の際に条件としたように，市街地に隣接する工場敷地の寄附を受け，S10.７月に着工，翌年 10 月には操業を開始した。工場の設計と施工は清水組で，倉庫は阿部美樹志による設計であった。社宅の設計は自社と考えられ，施工は大野組（士別町）と鶴間組（旭川市）であった。

磯分内と異なり，士別の場合には工場創立時には既にある程度の市街地が形成されており，いくつかの医療機関もあったので，それらの利用を考えたためか，配給所は小さく，医局は設置されなかった。

６．戦前期の北海道における製糖工場の社宅街の比較

会社別では，①北糖では社宅街の区画を工場に正対させないが，明糖は正対させる，②北糖では社員用社宅と作業員社宅の区画を比較的離すが，明糖は隣接させる，③北糖では既成の市街地に隣接していないが，明糖は隣接させる，などの違いがみられる。

建設時期別では，後に建設された磯分内や士別では，集荷に省線を用い，省線からの引き込み線のみを設けた。帯広と清水では，十勝鉄道と河西鉄道を設立しており，鉄道が社宅街と周辺の地区の発展に影響を与えた。

また，南洋群島や南大東島の社宅街よりも，全体の社宅数に比べて独身者や季節工用の寮の割合が多い。砂糖黍は刈り取った直後に圧搾が必要であるが，甜菜は貯蔵後の圧搾が可能であるため，原料の相違が社宅街の形成にも影響を与えていた可能性がある。

謝辞：資料収集と現地調査では，日本甜菜製糖株式会社の関係者の方々，特に田高滋子氏に，また，帯広市史専門委員の井上壽氏にお世話になった。記して謝意を表したい。なお，本稿の一部は，平成 21 年度科研費（若手研究（B），課題番号 20760430）（基盤研究（C），課題番号 20560598）によった。

参考文献

1）辻原，今村，安浪：戦前期の大日本製糖大東製糖所と北大東出張所社宅街について，建築学会大会学術講演梗概集， F-2，pp.163～164，2009.8.

Company Towns of Hokkaido Sugar Co. and Meiji Sugar Co. in Hokkaido before WWII　　TSUJIHARA Makihiko, KAKU Satoru and IMAMURA Satomi

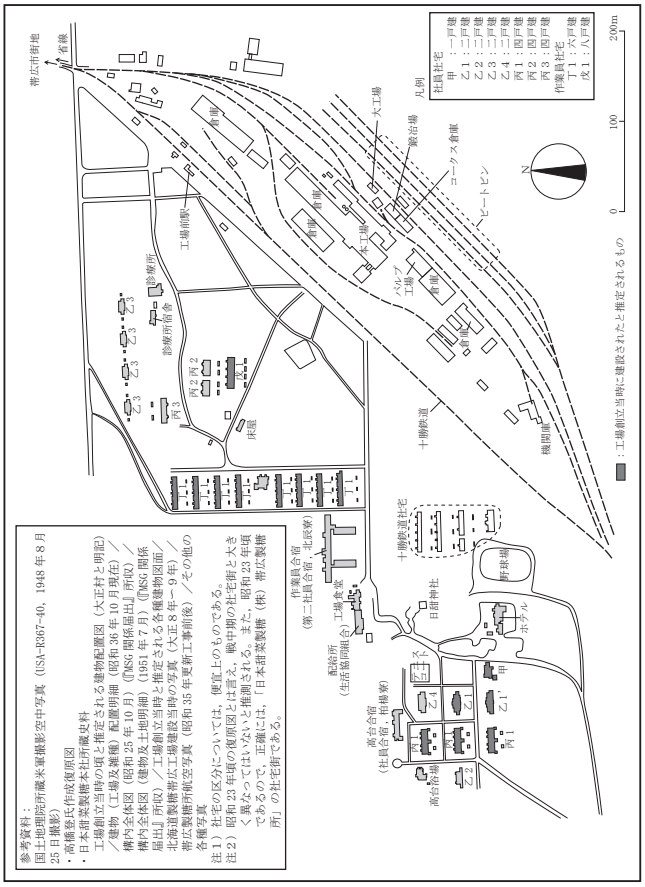

図1　北海道製糖（株）帯広工場の社宅街の復原図（昭和23年頃）

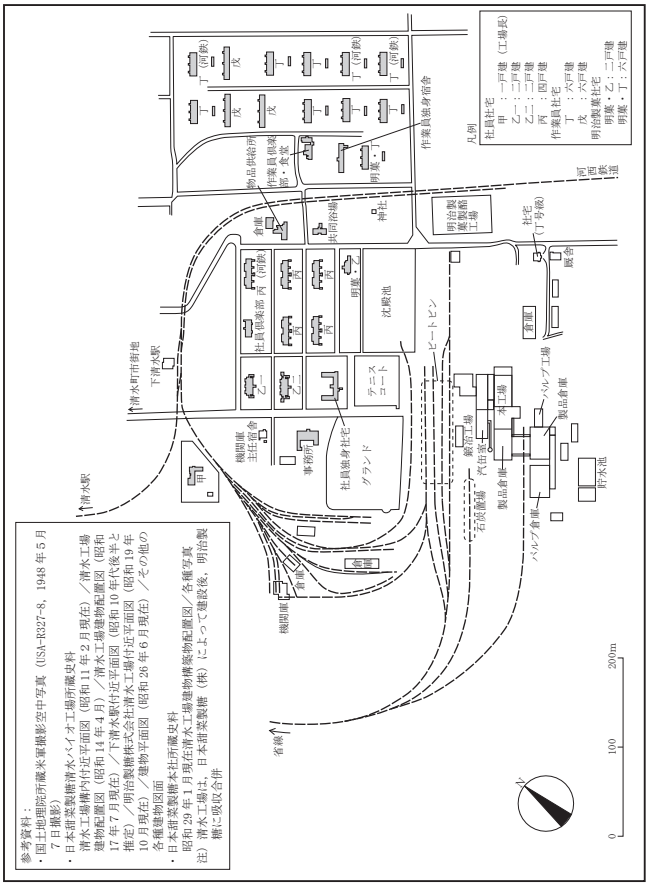

図2　明治製糖（株）清水工場の社宅街の復原図（昭和11年頃）

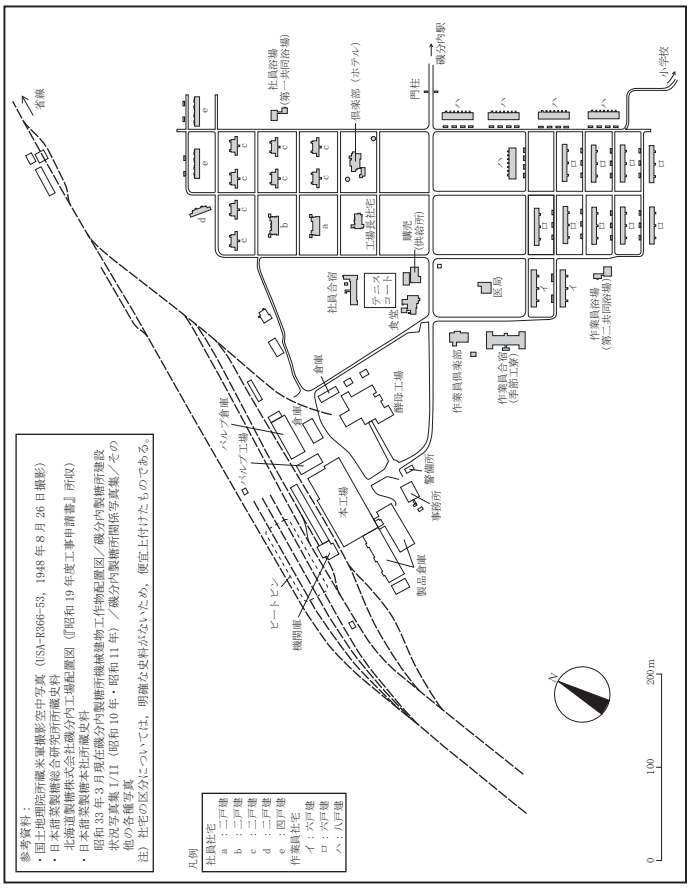

図3　北海道製糖（株）磯分内工場の社宅街の復原図（昭和19年頃）

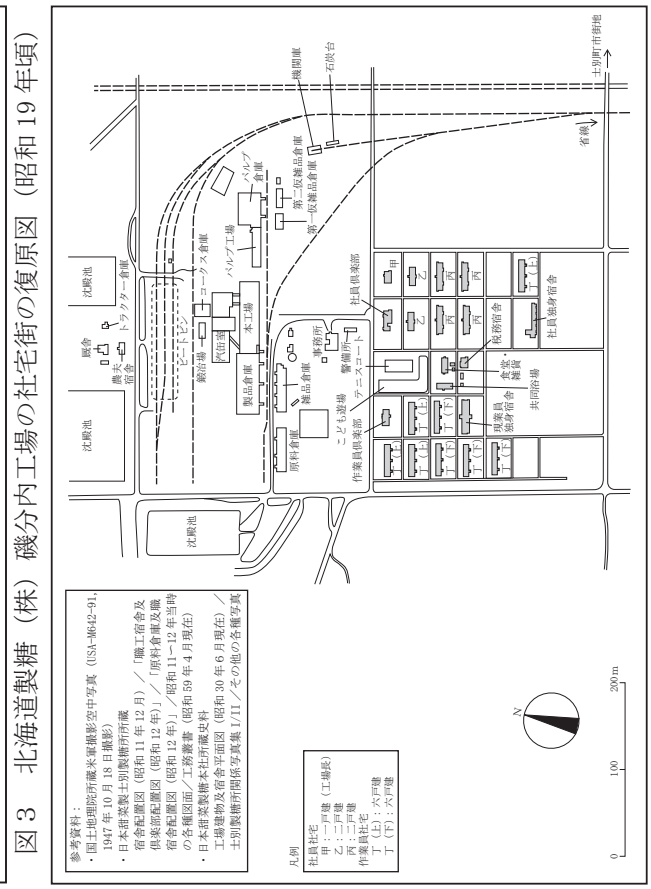

図4　明治製糖（株）土別工場の社宅街の復原図（昭和12年頃）

*　熊本県立大学環境共生学部　准教授・博士（工学）
**　秋田工業高等専門学校環境都市工学科　准教授・博士（工学）
***　アトリエ イマージュ

*　Assoc. Prof., Prefectural University of Kumamoto, Dr. Eng.
**　Assoc. Prof., Akita National College of Technology, Dr. Eng.
***　Atelier Image